

都市部に住む、高学歴の若い親たちの間で、「学校に通っていれば子どもは育つ」という考えが広がっているとの報告がある。親自身がそのように自分の育ちを一面的に捉えているからでもあるろうし、いわゆる格差社会の現実も背景にあるのだろう。

他方で、農村部や中山間地のような地域では、将来像や地元産業の見通しが立たず、雇用に乏しい。そして、「子どもは都市部に出るしかない。そのためには少しでもいい大学に行かせなければ」と考えて、子どもを学校と塾に追いやりがちではないだろうか。

こうして、いまのこの国では、都市部でも地域でも、子どもを学校に縛り付け、受験学力を上げることに子どもの将来を託さざるをえないような仕掛けになってきている。多少は疑問を感じていたとしても、「結局はいい大学を出た者が勝ちだ」「勉強以外のことは大学に入ってから考えればいい」といった辺りが、主観的には親の善意となっているように思う。

では、いま大学では何が起きているかというと、大学生の中退率や不登校率は年々増加し、過去最高水準に達している。不適応を示す学生には、うつ症状や摂食障害、種々の神経症状など、精神的な病いが顕著に増加し、命にかかわる重篤なケースもまれではな

い。卒業後の進路選択をめぐっても困難が山積している。どうしてこうなってしまうのだろうか。

考えてみると、いまの親、教師を含む大人たちは、子どもと距離を置きすぎ、子どもを社会から遠ざけすぎていないだろうか。余計な心配をせずに、勉強に専念できるようにとの配慮から。

しかし、子どもはそんなにヤワではない。地域社会の問題や産業の問題を、大人が子どもに率直に語りかけ、対話し、考え合い、できる範囲で行動にも移していく。こうした機会を家庭でも地域でも、また学校でも意識的に設けていかなければならないと思う。

子どもはこうした問題を知りたがっているし、しっかりと受け止めて考えることができる。そして、そうした経験を積み重ねていくことが、地域の担い手を育てるのみならず、大学に行く意味や大学で学ぶ意味も明確にしてくれる。

人は、他者との関わりのなかで自分に向き合うことを通して人格を形成していく。学校に通ってさえいれば、子どもがまっとうな大人になれるわけではない。「勉強以外のことは大学に入ってから」では、手遅れになっってしまうことがありはしないか。

(文責：西本勝美・都留文科大学)

連載・青少年健全育成シリーズ 第251回

「子どもはそんなにヤワではない」

毎月第1日曜日は「家庭の日」

毎月第3日曜日は「青少年を育む日」です。

青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています
(10,500部発行)ので、多くの方の目に触れます！

問合せ：行政管理課 秘書広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,000	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,000	2カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月

⑤9・10月⑥11・12月の6パターンとなります。

掲載状況につきましては、下記をご参考としてください。

また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広 告 掲 載 欄

広 告 掲 載 欄